

# 保育実践力の育成に関する考察 1

## — 実習指導における横断性への着目 —

Consideration about the nurture of practical abilities of early childhood care and education 1  
— Attention to "commonality" in the guidance of teaching practice in early childhood care and education —

安部 孝 石山 貴章  
(こども学科 専任教員)

保育者の資質とは専門性であり豊かな人間性である。学生たちは実習指導をはじめとする様々な学習や経験を通してそれらを身に付けていく。本稿では特に、専門性を超えた生活者としての人間性の豊かさの育成について考察する。その際、施設及び幼稚園実習の指導内容に横たわる、学生自身の立ち位置としての〈横断性〉と学習内容の〈横断性〉を明らかにし、それを手掛かりにこれまでの指導や評価を振り返り、指導の手立てを探った。

【キーワード：保育者養成 実習指導 生活者 横断的指導】

### 1 はじめに

今日の保育者の重要な資質のひとつに、幼児の多様な実態に応じた指導の展開があげられる。これは生活や学びの主体者である幼児の生活環境や経験、そして個性に対する理解を前提とした配慮ある指導の構築を望むものであり、現代社会における幼児期の人間形成を担う保育者の基本的課題でもあると言える<sup>1)</sup>。また、こうした幼児理解や対応能力を超えた資質が求められている。豊かな人間性である。いつの時代にも自明の内に求められてきた人間性の豊かさが、なにゆえ保育者の資質として特に求められるのだろうか。

さて、保育者養成機関では、幼児期の人間形成を担う保育者を目指す学生の指導に当たるが、これまで学生の学びの状況を振り返り、保育者としての資質形成の指導法改善にどのように取り組んできたであろうか。また、学生が一人の保育者としての人格形成過程で、多様な学びをどのように自身の成長に生かし、専門的な実践力に高めているのだろうか。

本稿では、指導に当たる教師の専門性を帯びた様々な指導や学習展開の狭間における、一人の生活者としての学びや成長の質の確保について、複数の実習指導に横たわるさまざまな〈横断性〉に着目し、効果的な指導の在り方を考察する。特に、複数の専門領域を奔走し保育者の資質を形成する学生自身の立ち位置としての〈横断性〉と、学習内容の〈横断性〉についての検討を通して、そこに求められる保育者の資質を明らかにしたい。

そしてこの考察を通して、養成機関は学生の指導の根底に、幼児の人間形成に関わる保育の質を高めるといふ見えにくい課題を常に背負っていることを再確認

したいと考える。

### 2 保育者養成における学生とその立ち位置

#### (1) 〈生活者〉という視点

本学の学生の多くは、保育士や幼稚園教諭など複数の資格・免許の取得に向けて学習する。その過程では、教育実習や保育所実習、施設実習などが必修課題として位置付けられ、それぞれに事前・事後の指導が施される。

時期としては施設実習が1年次後期に実施され、年度末休業をはさむ形で、2年次の5月には慌ただしくも幼稚園実習(前半)が開始する。時折、幼稚園実習の事前学習の内容と施設実習の学習内容とを混同する学生がおり、個別で、また全体で指導することがある。それぞれの専門性に関わる学習内容は特殊であり個別的であることを理解させることは、専門性の認識に関わり、保育者の資質形成において重要な指導事項である。

一方、幼稚園実習の指導場面では、学生はすでに施設実習を経て理解ができており、また、経験を通して身に付けていると思われる内容も多々ある。それは、例えば、実習先への連絡のとり方やあいさつの仕方、実習日誌の記入に際しての基礎的事項などで、施設実習経験を生かした応用可能な事柄である。各領域特有の専門性とは別に、それまでの学習経験を十分に生かすことで、学生はゆとりをもって実習に臨むことができるはずである。そこで、指導内容の共通性を精選・吟味し、また、課題解決に際しての学習や経験の応用性を大切な学生の資質としてとらえ、積極的に保育者の資質に高めていくための指導法を改善することが重

要と考える。

さて、個々の学生とは、保育者を目指す一人の〈生活者〉である。大学で学ぶ様々な知識や経験などは個々の内側において咀嚼され、保育者としての個性を帯びた資質へと醸成されるであろう。前述の混同や混乱などは、おそらく、〈生活者〉としての成長に無自覚なまま、新たな領域の専門性や資質を獲得するための、いわゆる「振り返り」や「仕切り直し」がうまくいかない非効率的な状態である。学びや経験に新たな特殊性を帯びた展開があっても、〈生活者〉としての内側に既に醸成された保育者の資質を自覚し、生かすことによってこそ、自身の保育者の資質を豊かに育むことができよう。その意味で、学習や経験内容の共通性と横断性に着目し、学生の一人の〈生活者〉としての育ちを見取ることを通して保育者の資質形成を図ることが可能になると考えられる。

## (2) 学生の立場という視点

学びの内容が個々の内において醸成され、いずれ保育者の資質として現場で発揮されることは望ましいことである。では、この醸成が学習過程で積極的に行われるために、学びの主体である学生の立場のいくつかの側面について確認したい。

保育者養成機関で学ぶ学生は、まさに〈学ぶ立場〉から〈保育・指導する立場〉へ転換するための過渡期にあり、実際には、その両面を具有した立場であるととらえられる。

例えば、施設実習の事前指導では、「実習生の心得」としていくつかの項目の中に「実習生も先生である」と位置づけ、一方で「指導に従うこと」と示している。また、幼稚園実習でも同様の指導を行っており、実習生とは、幼児にとっては先生であるが、実習園の先生方からは謙虚に学ぶことを指導している。つまり、学生は実習において「保育・指導する」側面と「学び取る」側面という二面性を備えた立場を要求されている。

そこで、施設実習を経験した学生の幼稚園実習に向けた指導では

### 【A】

- ① 幼児期という、生涯にわたる人間形成の基礎を培う（保育・指導する立場）
- ② 幼児期という、生涯にわたる人間形成の基礎を培うことを学ぶ（学び取る立場）

という二面的な立場の育成と、さらに

### 【B】

- ③ 学びの途上にある一人の〈生活者〉としての立場の育成とを見通した指導を講じなければ

ならない。

【A】は実習の具体的な専門領域における二面性であり、【B】は【A】を規定しながら、①と②の成果によってその内容や質が変化するものであると考えられる。

学習、生活場面としては【A】と【B】の二面としてとらえることもできるが、日常、教師が遭遇し具体的にその人間性を評価するのは【B】の立場であろう。しかし、【B】をもって専門的資質としての【A】を正確に評価することは困難である。それゆえ、むしろ【A】(①②)に関わる具体的な指導を吟味精選し、【B】の育成に反映させることが指導上、効果的と考えられる。

## (3) 求められる保育者像という視点

学生が実習生として期待される資質は、近い将来に「保育者」として求められる資質でもある。例えば、文部科学省では教員に求められる資質と能力を次のように二つの側面から提示している<sup>2)</sup>。

ひとつは、「いつの時代にも求められる資質能力」で、それは、

- 教育者としての使命感
- 人間の発達についての深い理解
- 幼児・児童生徒に対する教育的愛情
- 教科書等に関する専門的知識
- 広く豊かな教養 である。

そしてもうひとつは「今後特に求められる資質能力」で、

- ① 地球的視野に立って行動するための資質能力
  - ・地球、国家、人間等に関する適切な理解
  - ・豊かな人間性
  - ・国際社会で必要とされる基本的な資質能力
- ② 変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力
  - ・課題解決能力 ・人間関係に関わる資質能力
  - ・社会の変化に適応するための知識及び技能
- ③ 教員の職務から必然的に求められる資質能力
  - ・幼児・児童・生徒や教育の在り方についての適切な理解
  - ・教職への愛情、誇り、一体感
  - ・教科指導、生徒指導のための知識、技能及び態度である。

この資質能力が求められる理由は、「これからの教育には子ども一人一人の個性を尊重するとともに、基礎・基本を確実に定着させ、自ら学び自ら考え、主体的に行動し、よりよく問題を解決する資質や能力などの『確かな学力』や『豊かな人間性』、たくましく生きるための『健康や体力』などの『生きる力』を育ん

でいくことが重要<sup>③</sup>となっているからである。つまり、保育者を目指す学生たちは、「生きる力」を育成し得る「生きる力」をそなえた存在でなければならない。

③は、保育者の専門性として学習内容を比較的構成し易い性質のものであるが、これに対して①②は、その獲得過程や定着の様子を客観的に明らかにすることは容易ではない。これは、先に「学生の立場」で検討した二面性の問題と非常に似通っており、また深く関連している問題でもある。

前述のように、学生は「学ぶ」立場から「保育・指導する」立場への転換期にある。実習や様々な学や経験を通して保育者の資質は身に付いていくものであるが、実際に実習を終えて評価されるのは、単に学習した内容だけではなく「どのような保育者になり得るか」という側面である。幼児の理解や保育の技術は、現場での具体的な経験が乏しい学生にとってなかなか獲得しにくい。また、その力を発揮する機会にも恵まれないのが現状である。こうした機会がなければ十分な評価を得ることも難しい。

このことから、養成機関で育成する保育者の資質は単に保育の専門性におわらない、それを裏付ける〈生活者としての〉「豊かな人間性」を含むものと認識する必要がある。

では、その豊かな人間性とはどのように育成されるのだろうか。これまで、保育者の資質をどのように認識し、そこにどのように豊かな人間性を求めてきたのを改めて確認する必要がある。

#### (4) 評価（観点）という視点

幼稚園実習は施設実習に続いて、5月下旬から6月上旬にかけてを前半期として、また、10月中旬から下旬にかけてを後半期として実施される。後半期の実習を終了すると、実習園から「実習態度」「子ども理解」「保育技術」「教師としての資質」の項目に沿った複数の内容・観点ごとに5段階の評価を得ることになっている。特に、全項目を反映している「教師としての資質」は次の5つの内容・観点によって評価される。

- a. 教育方針への理解や保育に対する研究心・向上心、創意工夫がある。
- b. 情緒・感情が安定している。
- c. 誠実さや積極性がある。
- d. 適切な自己洞察力がある。
- e. 表情の豊かさや子どもへの愛情、思いやりがある。

また、施設実習における評価項目は「態度」「洞察力」

「援助技術」「学習」となっており、特別に資質と称した項目は設定されていないが、各項目の内容・観点に幼稚園実習の資質と共通するものを見出すことができる。それらは、

- a. 「洞察力…利用者、職員など共にいる人々の状態を敏感に受け止めることができた。自分がどのような働きをすればよいか洞察し、行動できた」
- b. 「態度…指導や助言を理解し、誠実かつ謙虚な態度で行動した」である。

評価は幼稚園実習では5～1の評定による5段階で、施設実習では優・良・可による3段階で評価される。いわゆる「不可」を表す表記はないが、いずれの項目もその向上策としての具体的な指導法や評価規準を明らかにすることが難しいものである。

そして、これらの実習生の人間性に対する評価は、評価者の主観性は免れないものであり、前述の「変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力」の一つである「人間関係に関わる資質能力」が深く影響するものであると考えられる。

これまでの考察を整理する。学生は〈生活者〉として様々な学習や経験を自身の内において保育者の資質へと醸成していく。その資質とは豊かな人間性であり、それゆえ、他者による評価という側面からは、人間関係能力が強く影響すると考えられるものである。

では、この「人間関係に関わる資質能力」をはじめとする保育者の資質が、施設実習～幼稚園実習の過程で、どのように学生自身の成長課題として認識されて、育成され得るのだろうか。

### 3 指導の構想

これまでのいくつかの視点による考察から、保育者養成における保育者の資質の育成と、専門領域の学習を通じた〈生活者〉としての人間性の形成とが深く関わっていることが明らかになった。そこで、保育者養成における指導の具体的な可能性を、〈生活者〉としての育成を軸としながら、施設実習と幼稚園実習の指導の工夫から検討したいと考える。

#### (1) 幼稚園実習の事前事後指導

事前事後指導のねらいは「実習の目的や取り組み方について理解し、さらに、実習を通して幼稚園教諭を目指す者は人間的に成長しようと常に心掛けなければならないことを理解する。また、振り返りの中から自己の様々な課題に気づき、自己の変革や充実を図るた

めに、より高い目的をもって行動することの大切さを学ぶ。…」と設定されている<sup>(4)</sup>。

ここでは、実習を通した「人間的な成長」が求められている。それは「振り返り」による「自己の様々な課題」への「気づき」であり、より高度な自己の成長を目指す態度を期待するものである。そこには、保育者としての具体的で専門的な学習内容の習得は当然のこととして、自身の学ぶ態度や解決すべき課題の自覚が盛り込まれている。つまり、学生には「学ぶべきことに気づき、自身で学び、自己を高める」姿を要求しており、学生は実習を通して求められる保育者像を自身の中に育て上げるのである。

さて、幼稚園教育実習の事前事後指導では「マスター・ペーパー」と称するワークシートを用いた振り返りに取り組ませている。学生は前半実習を振り返り、後半実習までの自己課題を明らかにし、さらに後半実習後には成果と長期の視野に立った自己課題を設定する。この場合の振り返りの観点は「保育の専門家」としての成長と「生活者」としての成長を遂げるための自己課題の設定である。これらはいずれも一朝一夕に成果を上げることは難しく、そこで課題を概ね「短期…後半実習まで」「中期…就職するまで」、そして「長期…現職者として数年後まで」とに分けて設定している。

ところで、本学における「マスターペーパー」の取り組みは、実習に臨む学生の「生活経験の不足」<sup>(5)</sup>を問題意識とした、その解決に向けたひとつの手段であった。しかし、現在（平成18年度から）は、自己省察に基づいた自身の成長過程を見通した解決課題の設定の手立てとして活用している。なぜなら、養成機関における指導段階で「生活経験の不足」を十分に補い、その効果を持って人間性ともいべき〈生活者〉の資質の改善・向上を図ることには評価の問題も踏まえ、若干の躊躇いを感じたからである。また、手立てとしての事前体験活動等の推進や意義の周知に困難をも感じたからである。

しかし、新たな意味付けをした「マスターペーパー」を活用し、専門家としての学習を通した〈生活者〉としての成長や課題を自覚させることはできた。<sup>(6)</sup>また、そのことで様々な領域に渡って学習し、成長していく一人の〈生活者〉としての主体…自分自身を学生に認識させることができたと考える。

## (2) 「マスターペーパー」

ところで、幼稚園実習における専門家としての学習や〈生活者〉としての成長という概念は、未だ幼稚園

実習という限定した領域において完結された、狭義的なものであると言わなければならない。実際、「マスターペーパー」での振り返りや自己課題の設定が、それまでの学習経験や〈生活者〉としての成長を十分に踏まえたものとしては検討されていないのである。また、最も近い時期に実施される施設実習の成果や課題、前半、後半実習の間にある保育所実習とのそうした意味での関連性もない。結局、学生に与える課題の最も重要な概念が無規定のまま放置されていたことになる。

ある特定の学習・指導領域から把握できる学生の実態は限られている。しかし、保育者の資質を育成することが目的に据えられたとき、一つの有効な手立てとなり得る「マスターペーパー」における〈生活者〉とはどのような意味を有するのかを一旦、学生の学びの実態に即して検討してみる必要がある。

「マスターペーパー」の設問（課題）は、以下のよう

### 【自己分析】

- 「私はなぜ保育者になりたいと思うのか」
- 「どのような保育者になりたいと思うのか」
- 「それはなぜか」
- 「プロの保育者として自立するために、何が必要か」

### 【自己課題】

- 「生活者として ○長期課題 ○中期課題 ○短期課題」
- 「保育者として ○長期課題 ○中期課題 ○短期課題」

### 【課題解決に向けた計画】

- 「夏休みを利用した短期的課題
- …（実施後）実施状況をスケジュール欄に朱書きする
- …実施状況を踏まえた反省・自己評価

### 【新たな課題】

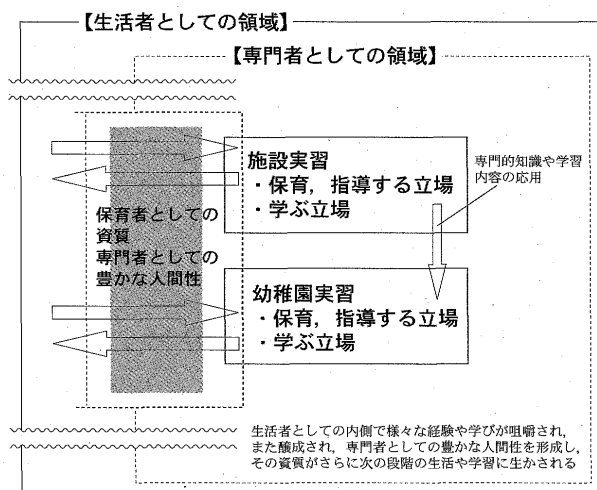
- 「中期、長期的課題への展開・関連
- … 生活者として 保育者として」

例えば、【自己分析】で「目指す保育者像」や「努力事項」に関する内容には、自分の幼児期の経験や施

施設実習での様々な出会いが大きく影響する可能性がある。また、自己分析そのものの変容に〈生活者〉としての成長や変容が表出する可能性も十分に考えられる。つまり、施設実習や幼稚園実習はいわば非日常的であり特殊な経験であるが、それを包含する〈生活者〉としての成長は、一貫した自身の様々な生活の営みや経験によって彩られた一筋の軌跡として認識される必要がある。そこで、〈生活者〉としての経験や成長を各領域の学習や経験に横断させるというイメージでの学習構成が必要となる。

### (3) 保育者の資質形成のイメージ

本来、生活の中に学習（の機会）は存在する。しかし、ここでは生活者と専門者（学習者）の立場を区別するために、生活者としての経験の領域と、（そこに含まれる）専門性に関する学習者としての経験の領域を内側で分けて考える。



### (4) 施設実習の事前事後指導

施設実習では、学生が事前に「研究課題」を設定し実習に臨んでいる。課題の内容に当たる「テーマ、目的（理由）、内容（方法）」等の設定は、各自の学習関心に任せられており、事後に「実習を終えて」と題し、実習中の経験を踏まえて考察などを行い、それを報告している。

そこには例えば「子供の実態に応じた対応の必要性を感じている」「子供の実態に関する情報を関わりある人物（職員）から得ようとしている」「関わり方の視点を得ようとしている」等の学習成果が読み取られる。さらに、総括的な気付きとして「ただ子供と接するだけでなく、子供たちにとっての良い環境を作って、接していくことが大切だ」等の気付きもあった。こうした内容は、明らかに幼児教育における援助や環境構成の理念に一致し、またつながるものである。

また、平成18年度の本学の施設実習担当者による指導総括の中で、次の二つが「将来の支援者としての育みたい力」としてあげられている。

- ①学生の実習初期の関心事を踏まえ『相手の立場に立った他者理解の姿勢、共感的な理解力』『理念（例：人権・ノーマライゼーション）と目の前の現実、自身の行動を結びつける思考力』こうした力の育成が、今後の保育者養成の重要課題となるだろう。
- ②学生の傾向を踏まえながら、「さらに、こうした傾向を持つ学生は、小さな失敗や批判への心的耐性が低い。青年期の学生達が、失敗や挫折を繰り返しつつもポジティブな自己イメージ、健全な自尊心を持つててほしい。その意味で、『施設実習』で失敗をしてしまった学生、力を出し切れなかった学生、施設側から評価を得られなかった学生へのフォローも必要である。たとえ失敗しても、現実に対峙する勇気と努力に意義を見出せる視点をもとめられる。」

①で要求されている保育者の資質は、一人の〈生活者〉としての豊かな人間性として理解し得る内容である。また、②は、実習での成功・失敗等の経験をその後の〈生活者〉としての学生の生き方に反映させる指導の内容である。こうしてみると、施設実習で求められる保育者像は、保育者の専門的な資質を備えた豊かな人間であり、豊かな人間性を備えた専門者であると言える。学生は必然的にその両面の具有を目指す一人の〈生活者〉であり、それゆえに〈生活者〉としての成長を見通した指導が必要となる。

ところで、②のような内面性に関わる様々な経験をどのように幼稚園実習に生かしていくことができるのだろうか。「たとえ失敗しても、現実に対峙する勇気と努力に意義を見出せる視点」を獲得させるための指導とは、経験を踏まえた自身の現実的課題の認識と、自身の内面性の向上をうながすような意義の発見や意欲付けを図ることに他ならない。したがって、これらを幼稚園実習の〈生活者〉としての課題として発展させることで、様々な学習経験（ここでは施設及び幼稚園実習）に含まれる内容や意味、そして成果や課題が保育者の資質形成に生かされるものと考えられる。では、〈生活者〉としての成長をうながすための、施設及び幼稚園実習における見直しをもった学習指導の具体的な手立てをどのように構築することができるだろうか。

### (5) 手立ての視点

前掲の「保育者の資質形成のイメージ」の図では、「専

門者としての領域」における学習や経験が「生活者としての領域」における豊かな人間性として醸成する様子を想定した。このことを前提として、次の二点の手立てが考えられる。

①生活者としての成長の振り返りと課題設定（「マスターペーパー」など）

- ・日常における変容 … 生活, 日常
- ・学習場面における変容 … 学習, 専門
- ・日常と学習場面の関わりにおける変容 … 豊かな人間性 (専門性)

②専門的知識や学習内容の応用

- ・多量域に渡る学習, 経験内容の精選吟味, 共通事項の応用  
(実習態度や技術, 日誌の記入, 持ち物, あいさつ等)

①は学生自身の立ち位置としての〈横断性〉であり、〈生活者〉としての存在そのものである。また、②は学習内容の〈横断性〉であり、指導体制における指導内容の精選や方法の工夫, 共通理解によって組織的, かつ具体的に検討されるものである。

①と②は相依相関し互いの内容を豊かにしながら、豊かな人間性をはぐくんでいくものとする。

#### 4 さいごに … 今後の課題

保育者の資質形成の課題は「豊かな人間性」に限定されたものではない。しかし、保育者の人間性が幼児の人間形成に直接影響するとき、それは保育者養成段階での最も重要な責任を負った課題として検討されなければならない。その際、特に〈生活者〉としての成長の一貫した見取りの方法については、記録や評価、そして管理のシステムなどの課題との関連を考慮しながら慎重に検討する必要がある。しかし、例えば「マスターペーパー」のように学生自身が〈生活者〉としての経験や課題意識を多領域に渡る学習過程で確認し、自己評価を踏まえた上で課題の形成を行うことは十分可能であるとする。

また〈横断性〉の存在が複数の領域間に存在することを認めるとき、同時に、領域同志そのものの非接続、非連続を明確にし、それらを架橋するような指導を講じなければならない。多様な学習や経験を通して、どのような保育者の資質を備えた〈生活者〉を育成するのか、その指導観の確立こそ緊急の課題と考える。

(1) 文部科学省 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教員養成部会 教員免許制度 ワーキンググループ (第14回) 議事録・配付資料 「教職実践演習 (仮称) カリキュラムイメージ (教職課程の改善・充実に関する協力者グループにおける検討状況)」 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/gijiroku/021/06052903/0...2006/10/02](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/gijiroku/021/06052903/0...2006/10/02)

(2) 文部科学省 「教員に関すること」, 『魅力ある教員を求めて』

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/miryoku/03072301.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/03072301.htm) 2006/09/21

(3) 文部科学省 「教員に関すること」, 『魅力ある教員を求めて』

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/miryoku/03072301.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/03072301.htm) 2006/09/21

(4) 埼玉純真短期大学 『平成19年度講義内容』

(5) 戸田竜也 「保育者養成におけるボランティア活動の必要性」 『埼玉純真女子短期大学研究紀要 第20号』 2004年3月 p.23

(6) 神戸洋子 草信和世 安部 孝 (共同発表)

『日本教育方法学会 第43回 大会発表要旨』

『幼稚園教育実習における個々の課題設定と展開 (1)』 2007年9月

#### 【参考文献】

■岡田正章 編著 『現代幼児教育全集 第10巻 保育者の資質と研修』

ぎょうせい 昭和59年 pp.116-126

■文部科学省 『魅力ある教員をもとめて』

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/miryoku/03072301.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/03072301.htm) 2006/09/21

■伊藤良高 中谷彪 浪本勝年 編著 『現代の幼児教育を考える 改訂版』

北樹出版 2005年

■小田豊 森真理 湯川秀樹 編著 『幼稚園・保育所実習』 光生館 2005年

■文部省 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館 平成18年

■福島大学教育学部50周年記念著書刊行会 編著 『21世紀の教師教育を考える—福島大学からの発信』 八朔社 2001年

■秋田喜代美 「教育力を育む学びの共同体づくり」 『教育と医学』 第53巻10号

(平成17年10月) p30-38